

今週の為替相場見通し(2019年11月5日)

| 総括表 | | 先週の値動き | | | 今週の予想レンジ |
|----------|------|--------|-----------------|--------|-----------------|
| | | 注 | レンジ | 終値 | |
| 米ドル | (円) | | 107.89 ~ 109.28 | 108.18 | 107.50 ~ 110.00 |
| ユーロ | (ドル) | | 1.1074 ~ 1.1175 | 1.1167 | 1.1050 ~ 1.1250 |
| (1ユーロ=) | (円) | | 120.30 ~ 121.46 | 120.76 | 120.00 ~ 121.50 |
| 英ポンド | (ドル) | | 1.2807 ~ 1.2975 | 1.2938 | 1.2840 ~ 1.3020 |
| (1英ポンド=) | (円) | * | 139.29 ~ 140.69 | 140.00 | 139.00 ~ 141.50 |
| 豪ドル | (ドル) | | 0.6811 ~ 0.6929 | 0.6913 | 0.6870 ~ 0.6970 |
| (1豪ドル=) | (円) | * | 74.07 ~ 75.30 | 74.70 | 74.40 ~ 75.40 |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 谷舗 直弥

(1)今週の予想レンジ: 107.50 ~ 110.00 円

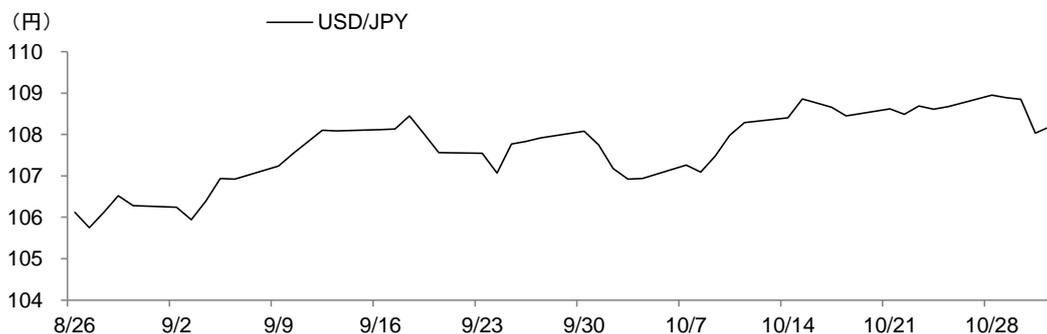
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は米中関係への懸念を背景に下落した。週初28日に108円台半ばでオープンしたドル/円は、EUが英国の離脱期限を1/31まで延期することを承認したことや、トランプ米大統領が「米中通商交渉が予定より早く進んでいる」との見解を示すと、リスクセンチメントの回復とともにドル/円も上昇し、8月1日以来となる109円台を示現。109円台では上値が重かったものの総じて底堅く推移した。29日は材料少なく動意のないなか、米10月消費者信頼感指数が市場予想を下回ったことやトランプ大統領によるFed批判を背景に、108円台後半まで小幅に反落した。30日は米10月ADP雇用統計、米7~9月期GDP(速報値)が良好な結果となったことや、10月FOMCの声明文で次回以降の利下げを示唆する「適切に行動する」との文言が削除されたことから、ドル/円は週高値となる109.28円まで上昇した。しかし、反政府デモの激化を受けて11月チリAPECの開催中止が決定されたことや、FOMCを受けた「sell the fact」の動きに108円台後半まで押し戻された。31日、中国10月製造業PMIが市場予想より悪化し若干リスクセンチメントが悪化しているところに、中国が「米国との長期的貿易合意の実現可能性に疑念」との報道が重なると、ドル/円は107円台後半まで下落。1日は108円を挟んだ推移が続くなか、米10月非農業部門雇用者数が市場予想を上回ったことや、一部報道で「米中は原則合意に達した」と報じられたことから幾分持ち直し、結局108円台前半で越週した。

今週のドル/円は小確りとした推移を予想。先週行われたFOMCでは予想通り利下げが行われたものの、声明文から次回以降の利下げを示唆する「適切に行動する」との文言が削除されており、米金利の低下に歯止めがかかっている状況。足元、市場の注目を集めていた「Brexit」・「米中通商協議」についても、Brexitは10月末での合意なき離脱がひとまず回避され、米中協議も第一段階目の合意に向けて交渉が進んでいるとの報道が聞かれる。これら政治要因の見通し改善を背景としたリスクセンチメントの回復は既にある程度相場に織り込まれていることから、今週どこまで上値を伸ばせるかは議論の余地があるが、最近の上値目処となっている109.32円(8月1日高値)を明確に上抜けられるかがポイントであると考えている。指標としては5日(火)の中国10月PMIサービス業と米10月ISM非製造業指数、6日(水)の欧10月PMI、8日(金)の中国10月貿易統計に注目したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/28~11/1)の値動き: 安値 107.89 円 高値 109.28 円 終値 108.18 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1)今週の予想レンジ: 1.1050 ~ 1.1250 120.00 ~ 121.50 円

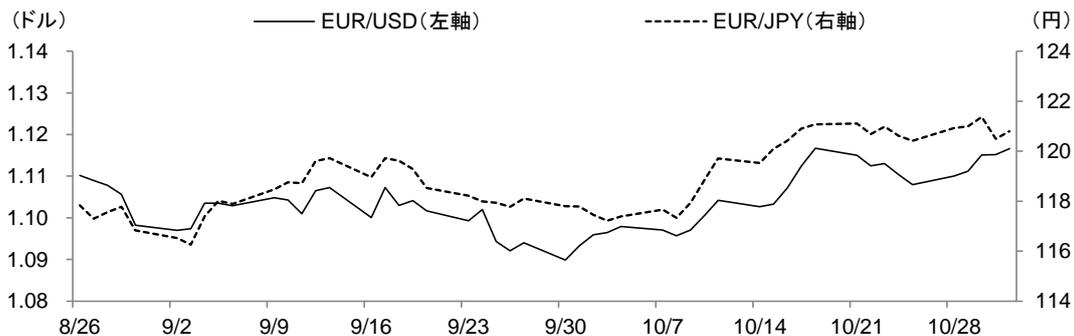
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は、合意なきEU離脱懸念の後退によるポンド高に連れて、また米金融政策の結果を受けたドル売りによりユーロ買いが進行し、ユーロ/ドルは1.11台後半まで上昇した。また、ユーロ/円については一時121円半ば付近まで上昇する場面も見られたが、リスクオフの円買いが先行し120円台後半で上値が抑えられた。週初は、28日にEUが英国の離脱時期延期を2020年1月末まで承認したことを好感したポンド買いに、ユーロ相場は連れ高となり、ユーロ/ドルは1.1100付近、ユーロ/円は121円付近まで上昇した。その後もポンド買いが進行する場面でユーロ相場も連れ高となり、ユーロ/ドルは1.11台前半、ユーロ/円は121円台前半までレベルを切り上げた。週後半は米FOMC後のパウエルFRB議長会見を受けたドル買いから、一時ユーロ/ドルは急落し1.1080に振れる場面も見られたが、米長期金利の低下を受けてドル売りに反転しユーロ相場は一段高となった。ユーロ/ドルは1.11台後半、ユーロ円は121円半ば付近まで上昇したが、中国サイドからの米中貿易合意に関する懐疑的な発言が伝わりリスクオフの円買いが進行し、ユーロ/円は120円台前半まで1円ほど円高が進行した。週末は米10月雇用統計の良好な結果を受けて一時ドル買いが優勢となったが長続きせず、ユーロ/ドルは1.11台後半、ユーロ/円は120円台後半まで上昇してクローズした。

今週のユーロ相場は、ドル売りによるユーロ堅調地合いが継続すると予想。但し、米経済指標の良好な結果や米中貿易交渉の進展などが見られる場面ではドル買いが先行することでレンジ相場を形成すると予想する。先週の米FOMCを受けた米長期金利の低下により引き続きドル売りが優勢となると思料。ドル売りを受けてユーロ相場は堅調に推移する一方で、先週末の米10月雇用統計のように米経済指標が良好な結果となるとドル買いの強まりからユーロも弱含む場面が見られており、ユーロ相場の上値は抑えられそうだ。また、米国と中国の第一段階の貿易協定の署名にはマーケットは期待しているので、実現が困難となりそうな場面ではリスクオフの円買いが優勢となり、特にユーロ/円はレベルを切り上げて一段と上昇するのは難しいのではないだろうか。

(3)先週末までの相場の推移

先週(10/28~11/1)の値動き: (対ドル) 安値 1.1074 高値 1.1175 終値 1.1167
(対円) 安値 120.30 高値 121.46 終値 120.76



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.2840 ~ 1.3020 139.00 ~ 141.50 円

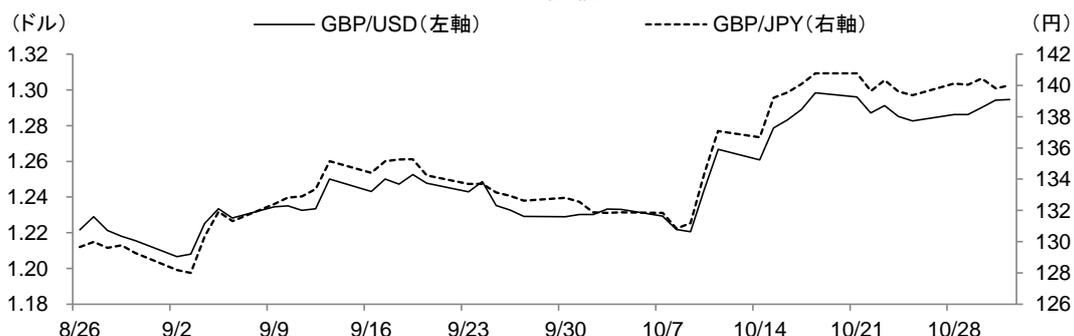
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、細かい上下動を織り交ぜながらも、ほぼ一貫した堅調推移。対ドル、対ユーロ、対円など主要通貨に対し、小幅ながらそれぞれ水準を切り上げた。英政局、EU離脱を巡っては、12月12日の総選挙実施が決定。英のEU離脱はいよいよ最終章の入口に手が掛かったと受け止められた。28日の議会任期固定法に基づく政府提出の議会解散動議は、必要な議会定数の2/3の賛成を得られず否決されたが、翌29日、同じく政府提出の特別法案を438対20の過半数で可決。解散総選挙実施が確定した。前後して、EU側も、前倒し条件付きで、来年1月31日までの離脱期限延長を受け入れると発表した。これで、合意なき離脱の可能性は向こう3か月ほど潰えた上、選挙結果が保守党の勝利(ジョンソン首相の合意に基づく離脱)、野党側の勝利(再国民投票実施のため結論は先送り)のいずれになっても、少なくとも当面の合意なき離脱の可能性は後退したものと受け止められた。こうした楽観が、この間のポンド堅調の背景になったのであろう。EU離脱が総選挙待ちの様子見となる一方で、金融市場が反応したのは、米7~9月期GDPの上振れを受けたドル買い(30日)、11月17日にチリで行われる予定だった米中首脳会談の見送り(会場に予定されたチリ国内の政情不安)を受けた株安(30日)、米連銀公開市場委員会後の株、ドルなどの乱高下(30日)、中国関係筋がトランプ米大統領との包括的で長期的な通商合意達成に疑問を呈したことを受けた株安と円高(31日)、米10月雇用統計の堅調を受けたドル堅調(1日)などの英以外の要因だった。

今週の英ポンド相場は、材料難の膠着を中心に予想。仮に値幅が出るとしたら、もう一段の上値切り上げを警戒する。上述の通り、英のEU離脱を巡っては、12月12日の英総選挙待ちで、目先、ポンドの方向感を明確に打ち出すような材料が提供される可能性は低い。7日(木)には英中銀金融政策委員会が予定され、同銀の「金融政策報告書(「インフレ報告書」改め)」も発表されるが、引き続き市場の関心はEU離脱動向に集まっており、ポンドが特段材料視するような反応は考え難い。先週(1日)、来年1月末をもって退任する英中銀カーニー総裁の後任候補に、シャフィック元英中銀副総裁の名前が挙げられたが、現時点では候補のひとりに過ぎないし、いずれにしても決定は総選挙後で、材料になるとはやはり思えない。英国外に目を転じると、米連銀高官の発言などには一定の注意も必要だろうが、米連銀公開市場委員会、米7~9月期GDP速報値、米10月雇用統計などの重要経済イベントを経て、目先、米から大きな材料が提供される可能性は低い。米中首脳会談の日程や会場が固まる可能性はあろうが、これまでの交渉の経緯を振り返れば、それが大きな意味を持つとも思えない。足下株価全般の堅調ぶりや円の上値の重さなどを見ると、英のEU離脱に関しても、米中通商交渉を巡っても、リスクに対する市場の警戒感の下がってしまっているように感じられる(或いは関心そのものが薄れてしまっているということかもしれない)。ポンド上振れを警戒するのは、対ドル、対ユーロ、対円と揃って、直近高値を上抜け、約半年ぶりの高値を更新する展開が射程に入っているから。純粋にテクニカルな要因に過ぎない。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/28~11/1)の値動き: (対ドル) 安値 1.2807 高値 1.2975 終値 1.2938
(対円) 安値 139.29 高値 140.69 終値 140.00



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6870 ~ 0.6970 74.40 ~ 75.40 円

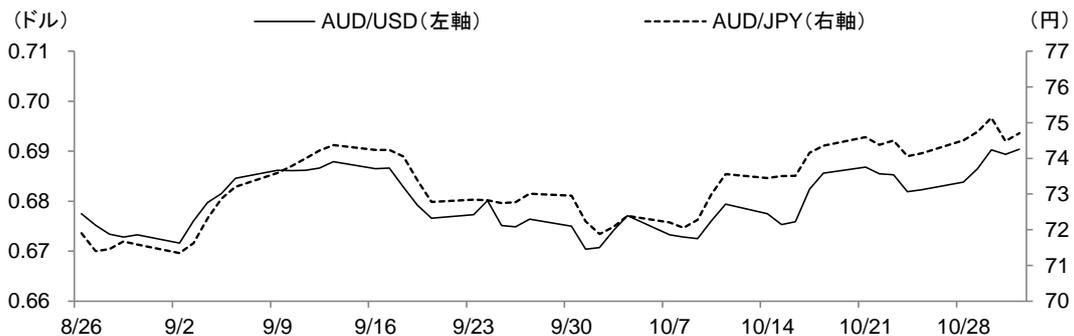
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは週初につけた0.6810近辺から徐々に下値を約100ポイント切り上げた。28日(月)アジア時間に0.6810近辺まで下落していたが、米中通商協議の進展期待でリスクオンとなり、そのままNY引けでは0.68台半ばまで上昇。トランプ大統領から「我々は予定より少し早く進んでいる。来月の合意署名は可能。」との発言や、中国が米国産鶏肉の輸入禁止措置を解除する用意があると表明したことが背景となった。この間ショート勢は持ちこたえた模様。円はリスクセンチメント改善で大幅下落し、AUD/JPYは74.58まで上昇。29日(火)は米中通商協議合意署名への期待が高まる中、豪ドル等の商品通貨が上昇。FOMC会合で利下げが90%織り込み済みという事やフィリップ・ロウRBA総裁のタカ派コメントも豪ドルを0.6872まで押し上げた。また足元1ヶ月の豪ドルオプションでもImplied Volatilityが低下する中、豪ドルコールの需要が顕著になっていた。30日(水)豪CPIは予想と同値で豪ドルの上昇は限定的。発表された米第3四半期GDP(速報値・前期比)は個人消費に支えられ1.9%と市場予想を上回ったものの、豪ドルへの影響は限定的で下げ渋った。この日はFOMCを控えた豪ドルは1日の値動きを30pips弱に留めた。31日(木)は早朝にFOMCで利下げが決定し、ドルからの資金アウトフローが相次ぎ、豪ドルは0.6900近辺から0.6930に到達。その後「フェーズ1」の貿易協定調印を巡り、中国が最重要事項で譲歩する意向はないと伝わり再度0.6890近辺まで下げた。AUD/JPYもアジア時間に75.30近辺まで上昇したが、74円半ばまで下落。米指標では米9月個人消費が予想を下回り、米失業保険申請件数(10/26)が増加。10月MNIシカゴPMIの軟調な指標を受け、ドル売りが加速する場面では一度0.69台へ浮上するも、リスクオフの流れから下落基調へ。しかし、0.6890近辺までに留まり下値が硬くなっている様子。1日(金)は前日に引き続きドルポジションの調整が入る中、豪ドルは上下しながら0.69台を回復して引けた。この日発表された米10月雇用統計では非農業部門雇用者数が128K(予想52K)となった他、米中貿易協定で原則コンセンサスに達したという旨のコメントが中国商務省が示したことも追い風となり、株価や原油先物が盛り返した。豪ドルは米雇用統計後にドル買いを背景に0.6890まで下落したものの、朝方付けた安値0.6883までは下落せず、その後発表された予想を下回る米10月ISM製造業景況指数でドル売りを背景に0.69台を回復。米製造業はセンチメント低下継続となり、7月の米利下げ期待は温存された形となった。

今週は先週に引き続き豪ドルは上値を探り、徐々に下値を切り上げる展開を予想。先週の米国利下げで今後一旦は据え置きフェーズと見られ、足元直近の不確実性がある程度透明になり、リスクオンムードで資金が比較的新興国や商品通貨に流れ易いと見られる。加えて、米豪実質金利差が未だマイナス幅ではあるが縮小し、豪ドル売り圧力が徐々に軽くなっているとみられ、下落局面ではそれほど下げず下値が硬くなっている。直近では特にマクロ勢からの豪ドルショートポジションの巻き戻しが起こっているようにみえる。その他、足元一か月25デルタのリスクリバーサルが未だ米ドルコールオーバーではあるものの、急速に豪ドルコールの需要が高まっているため下値は支えられ易いと見られる。今週はRBA政策決定会合や金融政策に係る声明文発表が予定されており、この豪ドル上昇の流れをこのまま維持できるか今後のRBA見通しに注目が集まる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/28~11/1)の値動き: (対ドル) 安値 0.6811 高値 0.6929 終値 0.6913
(対円) 安値 74.07 高値 75.30 終値 74.70



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。